

離 盃

広瀬卓爾

『惜別』を口実にまた前夜もかなり遅くまで飲み歩いてくれた同僚のY君。何軒目かの店を出てふと「明朝必ず見送りに行くよ」と呟いた。その時、私がどのように首肯いたのかよくは憶えてはいないが、(どうせ酔ったうえでの世辞だろう、今夜でひとまずの別れだな)と感じていたように思う。しかしそう言ってくれるだけでもその夜の酔いはまた一段と心地良かった。

次の朝、私は、私にとって最後になる『帰省列車』に、いつもより早い発車時刻のものを選んでいた。特別の理由があったというわけではないが、過度に感傷的になり易い己のこの、夕暮れ時だとそれだけ離京への惜別の念が募り辛くなるとでも思ったからであろう。

プラットホームに立ちその列車の入線を待った。さまざまの想いが去来した。浮かび消えまた浮かび来る想いは、新しい赴任先に寄せる抱負や期待ではなかった。帰郷の欲びで

もなかった。(今、東京を去るんだ)という何とも妙で複雑な心境とそして、十八年間の東京生活でお世話になった多くの人々への謝意の想いだった。恩師柏熊岬二先生、十八才から三十五才という、おそらく私の人生で最も重要な時期になるであろうこの期間、先生を恩師と仰ぐことのできた幸せ、時には実父以上に近しく思う日々もあった。改めて邂逅をおもった。三月の初めだったろうか、先生は車椅子を押す私に「僕との送別会が一番最後にしろよな」と語気を強めて仰った。まだその頃、送別会の話などまったく出ていなかっただけに返答に逡巡した。「おいっ、そうしろよ」と再度念を押された私は、やっとただ「はい」と答えるのが精一杯だったが、後姿に胸中を察し車椅子のハンドルにかけた手から力が一瞬抜けたのを思い出した。

「間にあつてよかった」とコートの際を立てながらY君が駆けて来た。「こんなに朝早く、本気だとは思わなかったぜ。」と礼を返した。「いよいよだな。」「元気でな。」

「世話になったな。」どちらからともなく同じ言葉を繰返し交した。ホームの売店に足を向けたのも同時なら求める品も同じものだった。朝、しかも寒風がホームを吹き抜けては

いたが、彼も私も缶ビールの栓をもう抜いていた。多少の気恥しさを感じたのも同じだったのだろう、いつになくテレながら彼が「乾杯しようぜ」とビールを翳した。「すまんなありがとう」と応えて缶を合わせ一気に飲んだ。何を語るともなく時間が流れ、やがて乗車を促すアナウンスが入った。

「いい研究のできることを祈ってるぜ」、朝早いアルコールが効いたこともあるのか彼の目が赤くなっていた。「最後の帰省で、そして出発だから一人でも見送りのあったこととも嬉しいのさ。」私は席に着いた。列車はまもなくホームを離れた。身を深く沈めた。(残っていたビールを干そうとして気付いた。確かYは、ここ二週間程前の診断で医師から酒を止められていたはずだったこと。)

(ひろせ たくじ 社会学部専任講師)

